

☆ 流動する国際情勢においては、隣国中国の動向は否応なしにわが国に深くかわつてく
 ☆ る。去る七月下旬の鄧小平再復活そして八月下旬の中国共産党十一全大会について、大新聞
 ☆ は多くの紙面を割いているが、読者にとってはなおわかりにくいことが多々あるのではな
 ☆ つか。そこで中国問題の専門家である東京外語大の中嶋嶺雄氏に、わかり易い解説を頼
 ☆ みた。同教授は十月から一ヶ月の予定でオーストラリア国立現代中国センター客員教
 ☆ 授として赴任される。本稿はその準備で忙しい八月二十六日、録音し、本紙でまとめたも
 ☆ のである。特に「回」にわたって掲載します。(4面に関連記事)

去る七月下旬、中国では中国共
 産党十一全大会が開かれ、内外の注
 目のうち鄧小平が再復活した。
 ついで八月中旬、中国共産党十
 一全大会開催され、ここに中国は北
 京政変以来の政治的、組織的空白
 をようやく埋めることが出来た。
 今回の中国の一連の政治的再編成
 をひとくち要約するならば、そ
 れは文化大革命からの離脱を決定
 的に明らかにしたということであ
 る。華国鋒政治報告は、この点に
 ついて、「第一次文化大革命は四
 人組打倒を標榜としてここに終焉
 した」というふうに述べていた。
 もとのこのことは文化大革命が
 勝利し、文化大革命の路線が勝利
 したことを意味するのではない。
 実際には文化大革命をすでに過去
 のものとし、そこから誤りしたこ
 とを意味するのである。

最近中国政治事情

鄧小平再復活の意味するもの

＜解説その1＞

中嶋嶺雄



これらすべて毛主席の指示に
 もつて処理してきた中国共産
 党としては、今回もこの事件の
 背景に触れるならば、そのこと
 と同時に、かつては江青夫人ら四
 人組とともに、鄧小平を批判して
 た華国鋒その人のレゾナントル
 をもたせようとするところでは
 あるまいか。そうであるがゆえに
 さて、天南門事件にはひとごと
 触れないという、一種の素通りが
 おこなわれたわけである。
 当面、このような素通りが必要
 な状況のなかで、暫時政治の安定化
 を図ったわけだが、今後「四つ」の
 現代化を進める過程で、毛沢東型
 社会主義の根本的な再評価を必要
 とするとき、あるいは、たとえは
 人民公社大躍進政策など手沢東
 中国は、今後の内政において多
 くの岐路を告げているといえよ
 う。

文化大革命は一九六五年秋、江
 青サロンの一員で上海の文芸評論
 家であった姚文元をその筆手と
 してのろしをあげたものだ。た
 が、やがて林彪が軍をバックに全
 面的な奪権闘争に加わった。そし
 て党のイデオロクとしては陳伯
 達、さらには江青夫人をはじめと
 し、姚文元、張春橋、王洪文など
 がその中心的な担い手であった。
 このような中心的担い手をすべて
 失脚せしめ、彼らを蛇蝎の如く
 罵倒しながら、なお文化大革命の
 勝利を語らなければならないとい
 う。今日の中国の内政的な矛盾
 がある。その矛盾に気付いた中国
 の指導部は、今回、「第一次文化
 大革命の終焉」という苦肉の表現
 を編み出すことによって、辛うじ
 て論理の整合性を得ようとしたの
 ではないか。

しかしながら、現在の中国社会
 の本格的な社会主義建設の方向に
 ふみ出したことを物語っている。
 しかし、ここには同時に非常に
 大きな矛盾が存在する。それはこ
 のから離脱を求めざるを得ない潮
 流に依拠して周恩来や鄧小平は
 脱文革を指向し、やがて来るべ
 き毛沢東以後の中国を視野に入れ
 て、いわゆる三株毒といわれた
 「総綱領」、「工業十干条」、「科
 学院提綱」などの綱領的プログラ
 ムを、すでに内部で準備してい
 る。鄧小平はたんにその政治的ス
 タイルが走資派であり、反文革で
 ある意味では逆行した方向をと
 ったといつていただけでなく、む
 しろ積極的に、毛沢東以後の中国
 の方向を規定するものとして、こ
 のような政治的プログラムを準備
 していたところに、鄧小平の存在
 の意味があったわけである。
 その故に、すでに知られている
 ように走資派打倒、鄧小平打倒、
 批鄧運動のキャンペーンが巻き上
 ったのであった。しかし、今日
 の現実には、まさに政策的にはそ
 のような鄧小平路線が全面的に復
 し、むしろ今後の中国の政策的な
 基調になつたわけである。今回の
 党規約のなかには「農業、工業、
 国防、科学技術の四つの現代化」
 という路線が明記されたわけで、
 中国がいよいよ工業化を中心とす
 る。このことは、つまり中国社
 会を現代化し、政治や経済の新し
 いシステムを志向しようとする潮
 流と、依然として毛沢東神話を唯
 一絶対の護身符としてかかげな
 ればならない華国鋒らの宮廷的体
 質との、いわば二つの異なる大
 きな傾向がそこに存在することを
 から見ると、華国鋒、汪東興(彼
 は言うまでもなく北京衛戍区八三
 四一部隊の司令として、そして党
 中央弁公室主任として今回の北京
 政変に非常に大きな役割を果し、
 そのゆえに副主席として今回昇格
 したのである。)といふ従来の毛
 沢東体制の中において、特務公安
 関係をひとすじに歩き、いわば毛
 沢東体制の中に黒子(タロウ)と
 して存在してきたようなグループ
 であるが、さらにはこのグルー
 プ内には呉德、北京市長(北京市
 党委員会第一書記)、あるいは倪
 志福、首都民兵総指揮(北京市党
 委員会第二書記)などの新北京
 権派実力幹線をつらね、かなり
 広汎な基盤があるように思われ
 る。

自己反省の時代

しいし、また容易でも
 あるが、裁判が証言と
 朝鮮問題のありあつかい方法
 は、ほんの氷山の一角にすぎな
 い。

米国の新聞が自己反省を示し
 た以上、恐らく日本の新聞も
 「自己反省」という新しい波
 きたることは、容疑者が公平
 に受ける権利を肯定した
 ことにはなるであろう。

あるいはクリスチャン・サイ
 エンス・モニターが「恥すべき
 法によって正式に有罪、無罪を
 決める前から、容疑者すべて
 クロと決めてかかると、天に代
 りて不義を討つ」かのように書
 きたことは、容疑者が公平に
 受ける権利を肯定した
 ことにはなるであろう。

東神話の崩壊にその余生を賭ける
 かもしれない。危険な政治家「鄧
 小平の立場」として、そこに深刻な
 亀裂が生ずる可能性があるような
 緯についてはひとごとと言及し得
 なかったことである。言うまでも
 なく天安門事件は、毛沢東政治に
 対する中国社会内部からの批判の
 爆発でもあった。そしてまたその
 ことを契機に鄧小平は失脚し、華
 国鋒は政治的に台頭したのであ
 る。

このような矛盾を含んだ中国内
 政の性格を私どもは十分に認識し
 なければならぬ。日本の多くの
 新聞論調は毛主席死後と同じ
 く、またしても集団指導制とい
 うようなことを強調しているが、私
 の見限り、まだまだ一方に毛主
 席のお墨付きを絶対的な護身符と
 するような体質が存在している
 と思える以上、中国政治における
 種の悪循環、あるいは前近代性
 というものは、依然断ち切れてい
 ない、と見なければならぬ。そ
 うなると特殊中国の政治的スタ
 イルというのが、非常に大きな
 意味を持つてくる。そのことばま
 さに、集団指導制というような近
 代的なスマートな政治のあり方と
 は本質的に異なつた、中国の政治
 文化に固有な、ある種の権威樹
 うすむく政治的ドラマの世界とい
 うことになる。

このような傾向と、「四つ」の現
 代化を自指す潮流との矛盾を
 考えあはせたときに、またまた
 中国は、今後の内政において多
 くの岐路を告げているといえよ
 う。

そのような中国の内政が、今後
 のように中国外交に反映される
 か、については、次号で言及して
 みたいと思う。

同電として朝日新聞が掲載した
 記事によると、ニューヨーク・
 発生して以来、ニューヨーク・
 ホスト、デリー・ニュースな
 ど、ハッスルぶりは異常なほど
 である。しかもセンセーショナルに
 事件をおおって、販売部数が大
 幅に伸ばしたという。

しかし、こういうジャーナリ
 ズムのあり方に対して、ニュー
 ヨーク・タイムズや、クリス
 ン・モニターが「恥すべき
 法によって正式に有罪、無罪を
 決める前から、容疑者すべて
 クロと決めてかかると、天に代
 りて不義を討つ」かのように書
 きたことは、容疑者が公平に
 受ける権利を肯定した
 ことにはなるであろう。

あるいはクリスチャン・サイ
 エンス・モニターが「恥すべき
 法によって正式に有罪、無罪を
 決める前から、容疑者すべて
 クロと決めてかかると、天に代
 りて不義を討つ」かのように書
 きたことは、容疑者が公平に
 受ける権利を肯定した
 ことにはなるであろう。

ち「あなたかわれは私は安心だ」
 という毛沢東のお墨付きを唯一絶
 対の護身符として、彼自身のレシ
 ジュを保持しようとして、
 テマシイ(正統性)を保とうとし
 てきただけに、こういう前近代的
 な権力継承のパターンの結果出現
 した華国鋒としては、毛沢東神話
 をさらに補強することにおいて自
 己の政治的安定性をはかろうと
 しているのではないか。こういう華
 国鋒らの行き方と、中国社会の潛
 在的な潮流、あるいは一最後まで
 悔い改めない走資派として自己
 貫徹し、そして再びその延長線
 に復活してきた鄧小平との間に
 は、決定的ななまが差があるとい
 いわけである。

これらを、いわゆる党内のさま
 ざまな政治グループのカーアロー
 である政治グループのカーアロー
 政治委員、鄧小平支持グルー
 プ、さらには今回政治局員とな
 った許崇清、徐向前、劉伯承など
 の軍の長老、それにウランフ(烏
 蘭夫、張廷発(空軍司令)、か
 つての広州の実力者で今回政治局
 入りした趙紫陽(鄧小平の出身地
 ・四川省の党委第一書記)などの
 旧東極派、そして何よりも鄧小平
 国鋒の政治報告があれほどくわし
 く四人組のいわゆる「陰謀」計画